

みらい  
すくすく  
通信

474号

この通信に掲載の野菜のお届け日

2020 年11月23 日～11月27 日

いつも有機野菜をお買い上げありがとうございます。  
毎週、旬の情報をお伝えします。



## 道東タイムスリップ

①新得、宮下農場<後編>  
～人間を動かすもの



宮下さんは今年 71 歳。家は京都の中心地にあったそうですが、幼いころから母親の実家、京都北部の漁師町で海に潜ったり、畑を走り回ったりした自然児で、それがベースにあるといいます。大学に進んでからも兵庫の親戚から田んぼの手伝いの話があり、田植えや稲刈りに没頭し、社会に出てからもそれを続け、自然な流れで畑に接する環境にありました。

一方で時代は高度経済成長期の後半、公害病など環境破壊が起こり、それに対する声も盛んな時期でした。社会的な文献、作品をむさぼるように見聞きしたといいます。

『終末から』(社会問題をとりあげた雑誌)、『パパラギ』(文明に異を唱えるドイツ文学)、『成長の限界』(スイスのシンクタンクによる研究発表)、『複合汚染』(環境問題で大反響を呼んだ長編)等々。知識を深めるにつれ近代化に疑問を持つようになり、豊かさとは何か、生きるとは何かをずっと問いかけてきたそうです。「でもやっぱり好きなのはチャップリンかな。『モダンタイムス』なんか映画のすべてに愛やら人生に大切なもんが入ってるもん」

社会に出たあとすぐ母親の看病で仕事を辞めることになり、その半年後母が他界。翌年、憧れていた北海道に、親戚が

北大にいたこともあって訪ね、以降釧路、根室と放浪し、昆布漁のアルバイトや椎茸栽培の手伝いをしていました。そしてそれを見ていた近所の農家に誘われ農業研修し、そのうちに新得に空き農家があるということで、なんとその流れで就農を決めてしまったのです。自然環境の中で育ち、環境問題を吸収した多感な時期に、進路はすでに決まっていたのでしょうか。「思いを伝えることが大事。発信することをなくしてしまったらおしまい。それを有機農業でやってるということかなあ」

“良心の実践”

便利さにより当たり前前にモノや環境が与えられ、他人の視線に価値観を見出していた時代もあったのかもしれませんが。親、学校、会社、政治、さらには神。何かを当てにせず、自らに生きるという思いが湧き出す時、その源泉には、よりよく生きるという思いが誰しもあるはずです。

宮下さんがよく口にする阿呆という言葉には、大勢に従うことをしない者への愛情とユーモアがたっぷり込められています。

「うちの野菜、美味いいうて食べてくれるそんな阿呆な人たちおるんか。ホンマにありがたいことです」

1950～70年代の高度経済成長期とそれに伴う公害問題、環境問題を経て、私たちは変化してきたのでしょうか。北海道有機農協において第一世代に位置するのが現在70歳くらい、40年ほど前に新規就農し、有機農業の拡大をスタートさせた農家たちです。便利な都会ではなく、厳しい自然環境ともいえる新得でしかも有機農業を続けるとは想像が容易ではありませんが、いったい何がそうさせるのでしょうか。前回に引き続き、宮下農場、宮下喜夫さんに話を伺います。

◀ハクサイはキャベツほどひどい虫害ではないとのこと。楽しみに待ちましょう!  
▼寒くなって育ったダイコンは順調に生育



▼手掘りでのニンジン。ニンジンも虫害で今年は規格外が多いと



『独裁者』(映画)  
ラストの演説の後半部より抜粋

監督・製作・脚本・主演：  
チャールズ・チャップリン

Let us fight to free the world, to do away with national barriers, to do away with greed, with hate and intolerance. Let us fight for a world of reason.

～世界を解放しよう  
国境をなくし、  
強欲や耐えることのできない憎しみを消し去ろう  
良心のために戦おう～